

科目名	担当教員	授業方法	授業形態	履修者数	履修学年
グローバル化と日本人	市村 光之先生	講義	対面・遠隔併用	18名	1～4年

【授業内容】

本科目は全学教育科目で、グローバルに活躍できる（外国人とうまく協働できる）人材の養成を目的とする科目であり、異文化コミュニケーションの入門編レベルの内容です。海外志向の学生のみならず、留学や海外勤務には興味がない、むしろ日本にいるほうが居心地がよい、外国人との交流は避けたいと思っている学生たちの関心を喚起する授業を目指しています。

異文化コミュニケーションに関する理論など、講義による書物的な知識の付与は最小限に留め、日本に住む外国人や海外駐在経験者の実体験を聴いてディスカッションしたり、ワークやケーススタディに取り組んだり、履修生が異文化理解の面白さ、奥深さを体感できる内容を心がけています。

なお、本科目の履修者数は、2018年94名、2019年90名でしたが、コロナ以降2020年28名、2021年18名と激減しました。2020年度は全面Zoomによる双方向ライブ授業、2021年度は可能な限り対面、状況に応じてZoomで実施しています。

【授業の実施方法】

授業回により異なりますが、以下①～④を組み合わせて実施しました：

- ①事前学習（読書課題）＋対面授業：通常の授業
- ②対面授業＋事後学修（オンデマンドビデオ講義）：授業内でワークやディスカッションの時間を多くとりたいとき
- ③Zoomを活用した双方向ライブ授業：海外含め学外の社会人講師が参加するとき
- ④オンデマンドビデオ講義：第1回授業（全学教育科目の指定実施方法）

【授業準備のポイント・工夫した点】

● 複数の授業パターンの試み

学生プロフィールの遠隔授業動向調査（2021年秋）では、今後の授業方法として「ブレンド型」授業つまり、授業内容により対面/遠隔授業を効果的に使い分けることを望む意見が77%を占めました。反転授業（ビデオ講義等の事前学修）の導入に関する設問では、76%が過度に負担にならないければ賛成と回答しています。2021年秋学期は、前述の異文化を体感できる授業にすることに加え、New Normal時代のあるべき授業方法を模索する意図も含め、いくつかの授業パターンを試みました。

①事前学習（読書課題等）＋対面授業

事前知識として知っておいてもらいたい内容があるときは、1時間程度で読める分量を読書課題として課しました。ワークの準備を課題として課すこともありました。全授業回のうち8回です。コロナ前は履修生の自主性に委ね課題を出すだけで、読んで授業に臨む履修生は6～7割くらいでした。終講時の独自アンケートで意見を求めると、つい読むのを忘れてしまう、感想を書く前提のほうが（教員に見られるので）読む気になる等の声があり、2020年より毎回の授業アンケートに、読んだ感想、考えたことを書かせる（400字程度）ようにしました。2020年度の終講時アンケートでは、書くのは大きな負担にはならず、読むだけよりも自分の考えを整理できてよい、との声が多かったです。読んだ率も9割に向上しました。

②対面授業＋事後学修

対面授業のワーク等で異文化を実感してから講義するほうが学修効果上がりそうな内容や、授業時間中はワーク等に時間をかけたいときは、講義や解説はオンデマンドビデオ講義とし、事後学習を課しました。全授業回のうち2回です。なお、ビデオ講義の場合、集中力は長く続きませんので30分程度にしています。

③Zoomを活用した双方向ライブ授業

日本に住む外国人や海外駐在経験者にリアルな体験を聴く授業回が4回あります。コロナ前は、平日の昼間に大学まで来ていただけることが前提でした。2020年よりZoomを活用し双方向ライブ授業にしましたので、社会人講師の選択肢の幅が増え、現在海外駐在している方にも協力いただいています。

● 各回の授業パターンについて

各回の典型的な授業パターンは以下の通りです。

- 1) 前回授業のフィードバック（5分程度）
- 2) 授業内容は2～3のパートに分けて、各パートは受動的に聴く時間（講義）と能動的に作業する時間（ワーク等）を組み合わせる
- 3) 授業終了後に授業アンケート：質問、授業の改善要望、小レポート（授業から考えたこと、400字程度）を授業支援システムから提出

言うまでもないことですが、授業設計にあたっては、科目の履修目標・到達目標を明確にして、その達成のために15回の各回のねらい、授業テーマを設定します。各回の授業では、取り上げるテーマに沿って授業内容を2～3のパートに分けて、各パートは受動的に聴く時間と能動的に作業する時間（問題を解く、議論する等）を組み合わせるよう心掛けています。たとえば、1つのパートを講義15分＋ワーク15分の計30分で構成します。履修生は講義により整理された知識を得られますが、あくまでも知ったレベルです。加えてワーク

や練習問題で試したり、ディスカッションで意見交換したりすることで、理解が不十分な部分に気づいたり、多角的により深く考えられたり、履修生は実感を伴う理解に落とし込むことができます。人間の集中力はあまり長く持ちませんが、講義とワークを組み合わせることで適度に集中を保てます。

ワークを取り入れると、思いのほか時間がかかります。講義中心の科目では、その分、講義内容を削らなければならないし、大人数なので難しいというケースもあるでしょう。本科目でも講義による知識付与が中心の授業回があります。その際は、たとえば30分講義した後で、二人一組になり講義内容を1分で相手に説明し合うペアワークを取り入れています。ワークの説明を含め5分以内で、大人数クラスでも実施できます。履修生は、自分が理解したことばで説明しなければならないという意識で講義に臨みますので、適度な緊張感をもって能動的に授業を聴く効果もあり、これもまたアクティブ・ラーニング手法の1つと言えます。

【従来の対面授業との違い～学習効果の観点から】

担当7科目（全学教育科目）の学生による授業アンケートの満足度は、コロナ前の2018、19年度の平均は3.76、コロナ禍の2020、21年度（21年は春学期のみ）は3.77と変わりません。出席率も、コロナ前の2年間で94%、コロナ後の2年間で96%でほぼ同じです。毎回の授業アンケートでは、過去1週間の授業外学修時間も自己申告させています。今年度の本科目の場合、平均1.1h、分布はほとんどが0.5～2hの間です。コロナ前も同程度で、過度の負担にはなっていないと判断しています。

全面的にZoomで実施した2020年度本科目の授業アンケートから、学生のコメントを抜粋すると：

- 徹底して双方向授業にこだわっているのが自分の中で刺激的で充実していた
- （Zoomで顔出しすること）最初は抵抗があったが、顔出しすることで受講生の態度や意欲が他の授業に比べてよかった
- ディスカッションやグループワークが活発に行われ、授業後に得た生徒からのフィードバックも積極的に公開し、各人の意見を交換する方法として最善であったと感じた

アクティブ・ラーニングの推進

上述の結果は、遠隔授業であっても、できる限り対面に近い授業方法で、対話を重視して実施した結果と考えています。筆者がしてきたことは、対面授業で実践していたアクティブ・ラーニングの手法を、Zoomの場合はZoom用にアレンジしたにすぎません。いわゆるDXでオンラインの特性を活かし、対面とは違う次元の授業手法を模索する動きにも一理あり、その必要性を感じている教員は、新たな手法を追求していただければと思います。た

だ、特別なことをしなくても、受動的学びと能動的学びを組み合わせ、双方向性を確保すれば、授業の質は保てるのではないのでしょうか。

学生との信頼関係構築

学生と教員との信頼関係が、殊に同じ空間を共有できない遠隔授業方式の場合はカギではないのでしょうか。教員が学生を評価するように、学生たちも教員を見ています。授業に真摯に取り組む教員の声には耳を傾けます。そうした信頼関係を取り結ぶ手段の1つがフィードバックです。本科目では授業の冒頭5分で、小レポートや質問にフィードバックします。いくつか主要なものを取り上げる程度です。ネガティブ意見には必ず回答し、逃げないことを示します。改善できることはすぐ改善します。全てに回答しなくても要所を押さえれば、不満には繋がりません。5分程度なら授業内容を圧迫しませんし、教員側の準備負担も大きくありません。

その科目を学ぶ意義の周知

学生 IR の一環として卒業生・就職先調査をしたときに、その科目と社会との係わりや、その科目が上級生になってから履修する科目とどう繋がるのかがわからず学ぶモチベーションが上がらなかった、とのコメントが卒業生から聞かれました。遠隔授業により独りで学ぶ比重が増えれば増えるほど、モチベーションを保つことも難しくなります。各授業回の中で、事あるごとにその科目を学ぶ意義を、多角的に、具体例を交えて説明することは、地味ですが実は大切なことではないのでしょうか。